

デモ討論

マイケル・エディ Michael Eddy

メモを見つけた。あの頃、北九州大学の図書館で、僕のごちゃごちゃしたスケッチブックに書いたものだった。

合理性と妥当性により全ての民が一つになることは、哲学の本質であり、それは賢慮が次第に暴力にとってかわるといふ正義の社会のことである。
カイル・ペレルマン (1963) *The Idea of Justice and the Problem of Argumentation.*

ノバスコシアにある母の家で荷物の整理をするはずだった。ふとこの一文が頭に過りスケッチブックだけを引き張り出し、物思いにふけた。「賢慮は暴力にとってかわる」この見解は、未だ採掘されていない鉱物のようにひっそりと僕の頭の片隅に潜んでいる。

その頃、僕はアーティストインレジデンスに参加するため北九州に滞在していた。人々の意思決定の過程に興味を持っていた僕は、日本様式のディベートについて調査をしていた。レジデンスの事務局を通じて北九州大学のパラメンタリー・ディベートサークルと連絡をとってもらい、その会議に参加し始めたりもした。日本におけるディベートの歴史を見てみる。特に戦後、アメリカの占領下にて改正が義務付けられた日本国憲法や国民が選挙権を得た民主制など含めたアメリカ様式とともに教育そして競技ディベートとして紹介され主に組織づくりのために普及していったようだ。



テキスト: 本討論会では米国愛国者法を導入すべきだ 調査写真 北九州大学ESSディベートサークル集会、2004年

日本のディベートについて語られたある文献によると、西欧の議論つまりビジネスシーンや会議等で行われる理論に基づいた主張や思想の展開は、日本文化固有のものではないらしい。日本人は一般的に対立を好まず、微妙な仕草で物事を伝える。権威を重んじた階層構造の集団評価基準があるために、一個人が意見を述べるには難しい環境があるんだとか。

そんな風に日本文化を抽象化されたところで腑に落ちないのだが。大学のディベートサークルの練習を見ていると英語のスピーチ能力を磨くことに重点を置いており、学生たちが思い浮かぶ議題といえは何でも良さそうだった。それは現実味の無いごっこ遊びのようで、架空の出来事や何々主義といった議題を選び、実際の学会ディベートや政策決定の際に使われる緻密な論証は必要とされていなかった。僕はその時の印象から“容姿の討論” (2004)を作った。「本討論会ではマイケルエディをアーティストとして日本に歓迎するにあたり、彼の髪の毛、ひげ、爪を切る」。大学のディベートサークルのメンバーが討論するパフォーマンス作品である。

このプロジェクトを行う為、さらに調査を進めていくと日本ディベート協会のウェブサイトにとどり着いた。1950年代競技開始当初からの全国ディベート大会のリストが掲載されている。(http://japan-debate-association.org/en/contest)見ていくと、今日まで一度だけディベート大会が中止に追い込まれている。1960年代後半に日本全国で巻き起こった学生紛争。この波はサークル活動にまで影響を及ぼしたのだ。

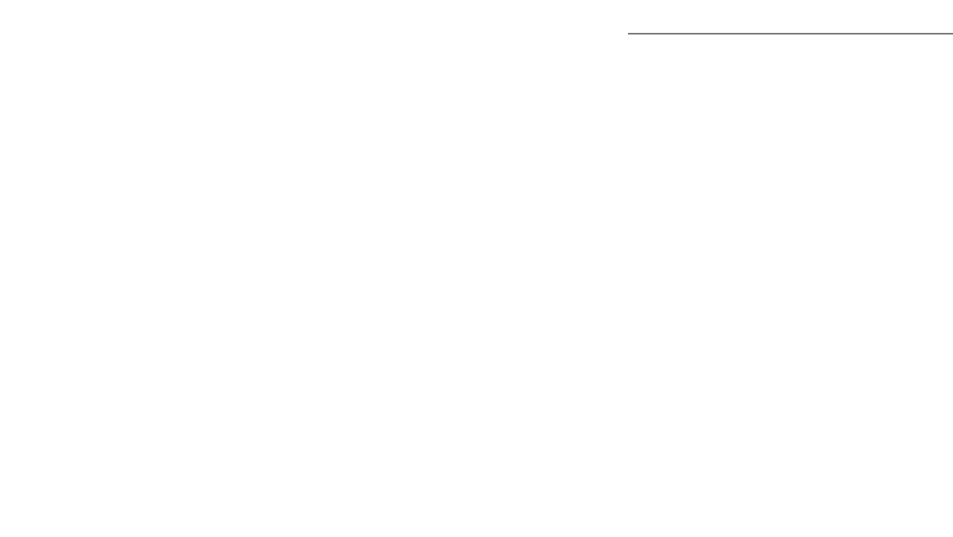
1968年秋
決議:アメリカ合衆国は全ての直接、非直接的な経済的、軍事的援助を東方諸国から撤退するべきである。(このディベート大会は上智大学キャンパスで勃発した学生運動の影響下にて中止された。)



形式的なパラメンタリーディベートと学生の暴動。実際各々の活動において各々の動機、表現方法、取り組み方があるだろう。この些細な情報は「対話」と「参加」というそれぞれの活動が奇妙な関係にあることを浮き彫りにした。学園紛争は日本に住む外国人が大好きなテーマである。(ラディカリズムが消えゆく今となっては、過激なテーマは大学教授やアーティストの絶好のネタとなる)とりわけ、日本の反対運動の形式はロラン・バルトに印象を与えた。彼は「表徴の帝国」にて集団活動の特徴をこのように記している。



6月5日(水)新築開
大阪支



6月5日(水)新築開
大阪支



一戦う学生たちによってリズムを与えられて叫ばれるスローガンの告げるものは、(何々のために、または何々に反対して、われわれは闘っているのか、という)行動の告発対象や理由であるのではなくて一そうであればそれは、言葉で持って理性の表白、正当な権利の確保の訴えを行うことになるのだが一ただ単にその行動それ自体(《全学連は闘うぞ!》)なのであって、したがってその行動は、もはや言語によって蔽われたり導かれたり正当化されたり無罪証明されたりはしない。そうでなければ言語は、たとえば、自由のしるしの赤い無縁帽をかぶった人々が歌った『ラ・マルセイエーズ』のように、闘争の外にあって闘争を超えた神のごときものになるのだが一 その行動は、暴力の総量にただ一つの動作、ただ一つの筋肉を付け加えるにすぎない純粋な暴力の行使によって、合唱をつけられるだけなのである。

ロラン・バルト (1970) 暴力の表現体 「表徴の帝国」より

僕は1968年のディベート大会の議題を約40年後の現代に嵌め込んでみる。未だアメリカが影響力を持ち軍を駐在させている現代の日本。市民運動や権力闘争などの活動自体がまるでおどぎ話になったような、民が権力や監視の支配下にある世の中で。一体どんな類似性や相違点のある議論が繰り広げられ、どんなパフォーマンスになりえるのだろうか。かといって、ただ中止に追いやられたディベートを再構成するのではなく、相容れないディベートとデモという意味の形式を融合できないかと考えた。



そこで僕は、東京でデモとディベートを同時に開催することを思いついた。これは、賛成派と反対派に別れたディベートチームがデモを行うパフォーマンスで、デモのスタート地点

から中間地点までまずディベートをしながら行進し、中間地点からゴールまでは賛成派も反対派も決議に従い一体となってデモを行うというものである。議題は「このデモは何に抗議するのか」。中間地点 (例えば、歴史に名を残す公園) では第三者の審査員によりディベートの決議が下される。その後、目的地まで決議された「メッセージ」のプラカードを全員が持つなりしてデモを行う。つまり、「メッセージ」はこのデモ隊内で決議が出たことを表示するわけだ。

さらに僕の考えは膨らんでいく。学生運動当時の服装も見逃せない。あの時代を風靡した学生政治家風の黒縁メガネ、スーツの上着とバツンヘア。これを今日に当てはめて見たが、服装などやっぱりどうでもよい。それが皮肉なことになろうとも、服装もこの時代における人それぞれの意見や主張だと捉えることにしよう。

それから、何も書かれていないプラカードや旗、角材をデモ開始時から持ってもらうことにしよう。デモ自体が意味を持たないところから出発するのもいい。はたまた、ディベートの決議が出た中間地点からメッセージを組み立てて持ってもらうてもよい。むしろそうすることで、「儀式的なディベートと集合体としての人々(聴衆)」と「他者に向けられたサインと意味付けられた集合体」を明確にすることになる。

この風景は言語化以前にかなりはっきりとしたイメージとして僕の頭に浮かんできた。

ところで、一体誰がこの活動に参加してくれるのだろうか？僕はこのデモを実現するために、いくつかの団体に声をかけていた。なるべくたくさんの人々に参加して欲しく、当時コミュニティ参加型のプロジェクトを行っていたアートスペースRICE+を含め、東京のディベートサークルやクラブにこの企画書を送って見た。そして2005年3月RICE+のディレクター 嘉藤 笑子から返信がある。

マイケルさん

連絡してくれてありがとう。企画書も受け取りました。

マイケルの企画を考察してきましたが、今回は実現するには至りません。理由は以下に挙げます。

- まず、なぜこの企画に私たちが必要とされているのかが不明確
- 現時点にて予算がないのとRICE+のスタッフ不足
- 日本における英語でのディベートは広く普及されていないため、マイケル自身で参加者を集めなければならない。
- 最後に、現在私は超多忙。

企画書をもっと煮詰めたい場合はまたご連絡ください。また、東京にお越しの際には是非私の事務所に寄ってください。何かアドバイスできるかもしれません。

ではまた

「一体誰のために行うのか？」という疑問がある

中で、この企画は開催する余地がありつつもそのまま封印された。当時、僕は参加者たちに対して割と気楽にこの活動に参加してもらえるだろうという思い込みがあった。でも事実僕は東京に住んでおらず、このデモに参加してくれそうな人達を直接知っているわけでもなかった。さらに言えば、僕の日本語はカタコトだったし、北九州の小倉図書館で見つけたデジタル版の1968年日経新聞の写真以外、僕はこのプロジェクトの記録をきちんと残してささいなかった。そして昔使っていたヤフーメールのアカウントも消失。もう手がかりさえもなかった。これは余談中の余談になるのだが。

